

Re:絶望の戦士から始める異世界生活

スーパーサイヤ人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

孫悟飯は人造人間に果敢に戦いを挑んだ。しかし、圧倒的な力の差を前に彼は成すす
べもなく死の嵐に身を晒すことになった。残された最後の希望を思い浮かべ、彼は苦痛
に顔を歪めることない、穏やかな表情で死を受け入れた。そのはずだった

「俺は……たしか……」

孫悟飯の異世界生活が始める。

ドラゴンボールのキャラクターをリゼロの世界に放り込んでも死らんだろうという
思い付きで書きました。目を通していただけると幸いです。

目

次

プロローグ

王都での一日

第一話 見知らる場所

第二話 『剣聖』との遭遇

第三話 盗品の行方

25

15

7

1

プロローグ

その日は突然訪れた、何の前触れもなく姿を現した二体の人造人間のよつて世界は瞬く間もなく恐怖に支配された。

人造人間に乙戦士は勇敢に挑んだ。しかし、人知を超えた修行により、かの宇宙の帝王フリーザを打ち破ったスーパー Saiyan へと化したベジータでさえも、あまりの実力差になすすべもなく殺された。その時唯一生き残ったのはまだ十歳も満たない、ウイルス性的心臓病により亡くなつた孫悟空の息子、孫悟飯ただ一人であつた。

晴天の下に、数えきれない戦闘により強化された聴覚は騒音を捉える。それは、現代社会の高性能の機械のよるものではなく、あの怪物たちの破壊活動によつて生じたものに違ひない。

「くっ！ 人造人間め!!」

怒声を轟かせたのは今年で二十四歳となる孫悟飯だつた。十数年の修行と人造人間

の死闘により、フリーザを倒した父と肩を並べることができたほどに成長した彼が視線を飛ばした先には、廃墟に化そうとしている巨大な都市があつた。

「悟飯さん行きましょ！　このままじゃあそこの人達は!!」

その悟飯に向け、焦燥と怒りが混じる意見を放つのはまだ少年期を抜け出せないトンクスだ。ベジータが殺される前に、ブルマとの間にできた息子であり、サイヤ人の血を引くからにはいずれはれつきとした戦士に育つだろう。人造人間を打ち破るほど。しかし、まだ時は早い……

「ダメだ、まだお前には早い！」

「僕だってサイヤ人だ、戦うんだ！」

少年の抗議に悟飯当惑の眉をひそめると、こうなつたら言うことを聞かない、こうしている間にも人造人間たちは人々の命を蹂躪している、ここまで思考を巡らせた彼はある決断をした。

「……わかつた、いこう」

「！　はい！」

若い師匠の意外にあつさりとしてくれた許可に、トランクスは僅かに驚きながら笑顔で勢いよく返事すると、出撃すると言わんばかりに両腕を沈ませた腰に添え、戦場に視線飛ばし凝視する。

しかし、これが孫悟飯の狙いであつた。

「つぐ！　悟飯……さ」

首筋に走る衝撃、濁る言葉と共にトランクスは倒れた。

「トランクス……すまない」

穏やかな表情でそう呟きを落とすと、舞空術で飛び上がり音速を優に超える速度で、悟飯は人造人間のもとに向かつた。

「キヤアアアアアアーーーーー!!」

「アハハハ！ ほらほら。逃げないと死んじやうよ!?」

「ハハハ！ もつとだ！ もつと喚け!!」

響き渡る途絶える予兆が無い断末魔。それを享受するように破壊の嵐を振りかざす二つの人影。

中の一つの光の玉が一人の少女に向かう時、一寸の光現る。

「はっ!!」

短い気合いと共に、光は片腕でエネルギー弾を彼方へ弾き飛ばす。

「来たか……孫悟飯」

あらかじめ知っていたように黒い長髪の青年、17号はそう呟くと、それに反応し金髪の少女、18号は作業をやめこちらを見定める。

「へえー、あんたまだ来たんだ。懲りないねえー」

侮る18号のセリフに、悟飯は「くつ」と歯を食いしばり、叫ぶ。

「今日こそ貴様らを倒してやる!! 人造人間共目えええ!!!」

黄金の気を爆散させ、スーパー Saiyan人と化した孫悟飯は勇敢に怪物たちに挑んだ。

「……」

行きわたる異様な人々と、竜に似た生物引つ張られ横断する馬車を呆然と眺める悟飯
はそこにいた。

王都での一日

第一話 見知らるる場所

中世風の景色が広がる中、悟飯は呆然と立ち尽くしていた。

久に聞く人の足音や車の騒音が奏でる「生活」の騒音。まだ暑いに届かない心地良い久を浴びながら、悟飯はただ目の前を横断する人々を呆然と眺め続ける。

唐突過ぎて事情が飲み込めない一方、颯爽と自分の脳内にある疑問が横切った。

——ここは、なぜ無事なんだ!?

一瞥すれば、西の都にも匹敵するだろうの面積をもつこの都市?は、人造人間に襲われてない。この事実は收拾の見込みのない更なる混乱を招くになる。人造人間によつて世界人口は凡そ数百万人までに減らせられた中、その数にも相当する人口が住むことが無事でいられていることはとてもじやないが、信じられない話だ。

それだけじやない、こここの住民は臆している様子が全くない、警戒心が皆無だ。あの二人組が今も尚殺戮を繰り返しているというのにどうしてこうも平氣でいられるんだ!?

そうやつて自己整理を必死に繰りかえしているなか、作業を中断させたのは、何者か

による声だった。

「兄ちゃん、どうしたよ——呆けた面して。リンガいるか?」

音源をもとに振り返ると、果物屋と言わんばかりに果実をずらりと並べ、行きわたる人々に身を晒すそれらの隣に、店長らしき厳つい顔立ちの中年が腰を下ろして此方に視線を向けていた。その手には、リンゴに酷似した赤く小さな可愛らしい果実が乗せられていた。

「はい?」

「まだ混乱から完全に抜け出してない所為か、悟飯は人の親切を間抜けた声で返してしまう。

「おい——何かあつたのか? 視線が定まつてないぞ」

こちらの異変を察したのか、店長は顔に汗を張り付けさらに気をかけた言葉を口にす

る。

彼の人間性ある言動のおかげか、穴を見つけたモグラのように俺は徐々に落ち着きを取り戻す。動搖が完全に収まつた頃、自分は改まつて彼の質問に答えた。

「いえ、大したことは——すみません迷惑をかけさせてしまつて」

「なあーに、謝ることはねえよ。ほれ！」

大したことじやないつと会話は終わりを迎えると、店長が何かを乱暴に抛つてきた。

「うおつとつと！」

誤つて握りつぶさないようそれを掴み取らずに手のひらに乗せようとすると、何度も跳ね上がる果実に自分もそれに合わせて大袈裟に動作をとつていしまい、店長に苦笑を作らせることになる。そんな情けない自分を恥じながら、手に乗せられているものに目を通すと、

——これは

目に映つたのは先ほど店長が商品をしてあずかつっていた「リンガ」と呼ばれる果物

だつた。あの動作と言葉からその意思是容易に読み取れるが、売り物をタダでもらうなんてことを、良心が簡単に許してくれなかつた。初対面の人にこれはいけない、とは言えはつきりと断るわけにもいかない。

「え、これ、もらつていいんですか？」

とりあえず一度本人の意思を確認する。万が一に備えて。

「ああ、もらつていけ！　その代わり、次は今回あげたやつの倍買つてもらうからな！」

予想を裏切らない返事のほかに、まさかの販売宣言に悟飯は若干笑みを引きずりながら、果実をもらうことにした。

—— そういえば……

「あの、少し時間を頂けませんか？」
「ん？　なんだ？」

ついさっきまで自分が抱いた疑問を思い出し、それをこの人に問おうとすると。口を開き声帯を振動させようとした刹那——

「つ」

——風が揺れた

何によつてそれが起こつたのは定かではない、が、長年の戦闘経験により磨かれた鋭い五感が確実にそれを捉えた。行きわたる人々から生じる布同士の微かな摩擦音。それらをかき消すように風を駆け抜ける何かが確かにいた。

氣を感じない敵との戦闘によりそうなつてしまつたのか、必要以上神経質にその正体を探る。しかし、自ら答えを導き出そうとする前に響く鈴のような声がそれを阻止する。

「つ！　待ちなさい！」

その声をもとに、俺は視線を向けると、

白いローブを羽織り、何かを追うように銀髪を揺らし駆け出す少女がそこにいた。奇妙な焦燥に駆り立てられるその顔には、何故か必死さも現れていた。瞬く間も無く、彼女は人ごみにかき消されそのまま姿を消した。

「今のは……」

急な出来事に、口から零れ落ちた独り言を店主は拾う。

「さー、盗みじやねえーか？ あれ」

久し振りぶりに耳にしたからか、その言葉の意味の理解には数瞬の時が要用された。人造人間の出現のより、時間があれば全て修行に打ち込んでいたから、日常の犯罪の感覚が鈍くなってしまうのも仕方がないかも知れない。

「盗み……か」

銀髪の少女の横顔が過る。

余程大事なものが盗まれたのだろう。

彼女の『気』は、乱れていた……

どの生物にも、必ず『気』という潜在的エネルギーが身に潜んでいる。

それは、個体の強さによって大きさが変化するなど、感情の動搖などによつて乱れが起きる。

そのコントロールを極めつければ、他人の気を探知することもできる。

悟飯は、氣で彼女の感情を読み取つたのだ。

その結果が上の通り、盗まれたものは財布なんかよりもよっぽど大事な何かだ。そして、それの持ち主はそれを探している。

ここまで分かれば、次のとるべき行動は何？

そんなの決まつている。

「すみません、用件を思い出しました。 リンガ、ありがとうございます！」

「ん？ おう、次はなんか買つて行けよ！」

「はい！ ありがとうございました！」

もらつたリンガを掴んだまま腕を振り、未だに乱れる大きな氣を目標に俺は駆け出し

た。

悟飯の姿が見えなくなつた後、八百屋の店主は憐れみが伴つた目で彼が向かつた先を凝視していた。

しばらく経つと、彼はつぶやいた、

「皮肉だな——若いのに……隻腕だなんて……」

第二話 『剣聖』との遭遇

俺は人気がない路地裏で狼狽えていた。

——うん——どうしよう……

あれから、既にかなりの時間が経っていた。

予定では既にあの女の子を見つけ出しているはずだが……

「まさか迷子になるなんてなー」

気は感じとれるから、彼女の居場所はしつかりと把握している。ので、このひとごみのからでも彼女を探し当てるに時間をかけるつもりはなかつたが。
「俺としたことが、まさか道に迷うことになつてしまふだなんて……」

いつもなら、こういう人探しの類は空を飛んで行うものだが。今回は異郷の地というのもあり、騒ぎを起こしたくなかったので歩行で足跡を追うこととした。その結果がご覧の通り、土地勘皆無が原因で目的地がわかつても、そこにたどり着くための道がわからず、と言つた状況に陥つてゐる。

「このままじゃ一まずそうだね」

それらに加え、目的の人物の気が段々と落ち着いてきていることが、何よりも自分を急かしていた。先程までは動搖で乱れていたものの、時間経過によつて彼女の気は段々と落ち着きを取り戻している。もしそれが盗品を取り戻したのであればよいのだが、あの時の風を起こしたもののが犯人だと仮定すれば相当の手慣れだ、この短時間で捕まえるのは無理があるだろう。

「いつそのこと飛んでしまおうかな、人目を避けて行けば騒ぎを立てることもないだろう……いや、屋根の上を進めば」

この手で行くかつと膝を折り、俺は飛び上がるうとする。しかし、行動に移す前にとらえた三つの気によつてやむを得ず中断した。人目を避けるための行動を見られては意味がない、ここは通り過ぎるまで一旦待つとしよう。

「ん？」

気が十数メートル先まで迫った所で、俺は異変に気付く。三つの『氣』には、邪念があつた。

「おい！ なにぼさつと突つ立つてんだよああん!?」

「命ほしけりや持つてるもん全部出せ！」

出会い頭に暴言を放つたのは、道をふさがるように立つて いる男三人組だ。

面だけで判断できるほど、悪人の雰囲気を漂わしている。

これはまためんどくさいことなつた、と俺はため息を漏らす。

「見てる通り何も持つてはいませんよ」

見せつけるように、俺は胸を開く。何も持つていなのは本当だが、それがわかつた所で大人しく下がつてくれるわけがない。

「ああん！ どうせ服のどつかに隠してんだろう！ 隠しても無駄だ！」

「隻腕の癖に調子こぎやがつて！ やつちまえ！」

そう言つて、俺に向かつて男二人が飛び掛かる。一般人には手を出すわけには行けないが、こういう連中なら少し乱暴に扱つても問題ない。

止まつているようにしか見えない二人の攻撃を、俺は難なく躰し、手加減に手加減を重ねた拳をお見舞いする。

「かはつ！ て、てめえ！」

「うぐつ！ こ、こいつ！」

殺さないよう威勢を殺しそぎた所為か、二人とも倒れなかつた。若干身を引きずりながらも、懲りずに再び襲い掛かる。

——パターンは変わつてない。

同一の攻撃対しこつちは手刃を作り、二人の気絶を図る。

「そこまでだ」

躊躇の欠片もない声が静かに響く。凜とした声色にもかかわらず、その存在感は凄まじく、同時に強者である代弁ともなるほどだ。

視線と声の元に移すと、騎士剣を下げている青年がいた。異常なまでに整つた顔たちに勇猛以外の譬えようがないほどに輝く青い双眸、何よりも目を惹くのは、燃え上がる炎のように赤い頭髪だ。

「たとえどんな事情があろうと、それ以上、彼への狼藉は認めない。そこまでだ」

尋常でない威圧感を放つ騎士剣に手を掛け、青年はこつちに歩み寄る。

その際俺が感じ取つたものは、地球人のものとは思えないほどの大きな気だつた。通常状態の自分にも後れを取らないほどの。

「ま、まさか……」

何故か顔から血の気が失い始める連中の一人が声を上げる。

どうやら、このチンピラたちは目の前の青年について何かを知つてゐるみたいだ。未だに震える紫色になりつつ唇に構わず、声を上げたチンピラは青年を指差した。

「燃える赤髪に空色の瞳……それと、鞘に龍爪の刻まれた騎士剣」

確認するように各所を指差し、最後に息を呑んで、

「ラインハルト……『剣聖』ラインハルトか!?」

——『剣聖』

「自己紹介の必要はなさそうだ。……もつとも、その二つ名は僕にはまだ重すぎる」

ラインハルトを呼ばれた青年は自嘲げに咳くと、チンピラたちを一気に震えだし、それぞれの顔を見合させ始める。逃走のタイミングでも探っているのか、しかし、この人を相手にすれば考えるだけ無駄だろう、レベルの差はあまりにも違いすぎる。その気であればきっと体が動いた瞬間にとらわれるに違いない。

仕立てがいいかつこから衛兵だと思われる彼は、このまま目の前の三人を捕まえると思つきや、発されたのは意外な言葉だった。

「逃げるのならこの場は見逃す。そのまま通りへ向かうといい。もしも強硬手段に出るというのなら、相手になる」

『剣聖』という聞くからに重い二つ名を裏腹に意外に甘いようだ。

腰に下げた剣の柄に手を当てて、ラインハルトは鋭い眼光を飛ばす。

「その場合は三対二だ。数の上ではそちらが有利。僕の微力がどれほど彼の救いになるかはわからないが、騎士として抗わせてもらう」

「じょ、冗談つ！ わりに合わねーよ！」

捨てセリフもなく、チンピラともは一目散に逃げ出す。この前の青年の規格外さが知れているということか。

奴らの姿が完全に見えなくなつた頃、俺は『剣聖』に深く一礼する。

「この度は助けていただき誠にありがとうございます」

「礼はいらないよ、君ほどの腕を持つていれば今の状況も容易く切り抜けられたでしょ

う。寧ろ謝らないといけないのは勝手に割り込んだ僕だよ」

先程の威圧感がまるで嘘のように、『剣聖』は微笑む。

さすがは『剣聖』というべきか、あつさりと自分の実力を見抜いている。二つ名があるくらいだ、下手に口を利くわけには行けない。

「い、いえ、そんな滅相も！」

『剣聖』という二つ名を気にしないでもらいたい。さつきも言つた通り、まだ僕には重すぎるんだ。碎けた話し方で構わないよ」

どうか普通の人のように接してもらいたいと告げる『剣聖』に、俺も表情を緩め、改めて言葉を紡ぐ。

「わかりました。えっと、ラインハルトさん？」

「呼び捨てで構わないのだけれど。君はそつちのほうが呼びやすいみたいだね」「ハハハ……」

あつさりと見抜かれて、俺は笑みを引きずいてしまう。

そういうえば名乗つてなかつたと、今度は相手の要件通りに自己紹介をする。

「お、俺の名前は悟飯、孫悟飯です」

「孫悟飯か、いい名前だね」

どうやら今のでよかつたらしい。ラインハルトさんも気軽に接したからか嬉しそうだ。

話しやすい環境になつたところで、俺はちょっとした質問を切り出す。

「えつと、ラインハルトさんは、そのー、衛兵なんですか？ とてもじゃないですけどその風には……」

「よく言われるよ。まあ、今日は非番だから制服を着ていないので理由だろうけど

そう言つてラインハルトは苦笑いしながら両手を広げる。

そのコミュニケーションの高さに僅かな憧憬を抱くと同時に、その一挙一動からまるで、言葉遣いに修正をかけたお父さんのようにも見えた。

「珍しい髪と服装、それに名前だと思ったけど……悟飯はどこから？　王都ルグニカにはどんな理由できたんだい？」

「王都……ルグニカ？」

質問を質問で返すというドジにはんすんする前に、聞き慣れない単語に俺は首をひねる。

——ん、待てよ……

そこで、俺の中にある仮定が成立した。

「まさか……」

そう呟いた矢先、俺はその真偽を確かめるべく、口を開いた。

「ラインハルトさん、人造人間という存在をご存知ですか？」

第三話 盜品の行方

人造人間……それは、世界を瞬く間に無く地獄に変えた二人組の総称であり、今やその名を知らぬ者はいない、恐怖の代名詞である。

——そう、その筈だが

「人造人間？ 何だいそれは？」

——それは、俺がいた世界に限ることでしかない。

「くつ、やはり……か」

ラインハルトさんの返答に、俺は奥歯を噛み締める。

事の異変には事前に気付いていた。中世期風の街並み、見覚えがない文字と地名に平穎に日常を過ごす星の数ほどある人々。ここまで来たら、最早否定する余地もないだろう。

「でも、なぜ異世界に……」

「ん？ 異世界？」

心中に留めるはずだった疑念を思わずこぼしたところを、ラインハルトさんは見事に拾い上げ、此方に問いかける。それに俺は無意識に疑念を口にしていたことに気づき、「あ」と声を漏らし、反射的に口を手で塞いでしまう。

何かを隠そうとしている人の仕草の見本である。それを見てラインハルトさんは、笑みを漏らし苦笑いを浮かべ、

「何か、困ったことでもあるんかい？ 悟飯？」

「い、いえ。そんな大したことじや」

何とか誤魔化そうとしつつも、この人相手では適當な嘘は通用しないだろう。明確な理由はないが、肌に触れる彼から漂うオーラが自分にそう告げる。

「本当かい悟飯、必要であれば手を貸すよ」

予想通り真っ先に疑つてくるか、まあ先程のあの動揺ぶりじや、一般人でも疑念を抱

かないほうが可笑しいだろう。それよりも、『剣聖』と聞くからに、重任を背負われ忙しいだろうにも関わらず、見ず知らずの俺にここまで関与を携ろうとする所、この人、ランハルトさんはかなりのお人よしに違いない。

「分かりました」

誤魔化しても無意味。ならば素直にこの人を頼ればいい。

「実は人探しをしていまして……」

ただ、別の目的で。

「人探し？　どんな人を探しているのかい？」

脳裏に蘇るのは、ついさっきまで自分が追っていた耳が尖った少女。

「えっと、そうですね。白いローブを羽織った銀髪の女の子ってところですかね」

「白いロープに、銀髪……」

「？」

——気が……

ほんの一瞬だが、俺は確かに感じた、強烈且つ静かな気の歪みを。
それの意味を吟味する前に、

「……その子を見つけて、どうするんだい？」

「あ、心当たりがあるんですか!?」

期待できると踏んで、顔を綻ばせてしまう。それにラインハルトさんは一瞬にして、
僅かに目を見開くと、瞼を閉じすまなさそうに口を開いた。

「ううん、すまない。ちょっと心当たりはないな。もしよければ探すのを手伝うけど」「
あ、いえ、ここまでしなくでも」

実際人探しの目的が達成したとしても、その後の予定は全く立てていない。あの銀髪

の少女の捜索に出たのは、単に力になりたかつただけで、言い方を変えればただの『余計なお世話』だ。最終目的である盗品の奪還の作戦の検討もないこの状況で、救助を要求するわけにはいかない。とは言え、ここまで来て人の好意を無駄にするわけにも……そんなことを考えていた時だった。

——！　待てよ……

「すみません、ラインハルトさん。質問を変えてお聞きしたいことが——」
「？　なんだい？」

夕日の日差しが愛着の山吹き色の道着と同化し、現在の時刻を告げている。

此処は貧民街。盗品をさばくとすれば、治安の悪いところで行われる可能性が高い、と推測し、ラインハルトさんにスラム街のような法律機関が働きにくい、地域の在り處を尋ねた結果、俺はこの場にいる。

個人の気を分別することができなくなつたため、盗品の主の捜索は仕方なく断念した
が——

「取り合えず、進歩はあつた……か」

貧民街の方々の協力も得て、俺は主に盗品を中心にお金のやり取りをしている、とする場所の情報を入手した。そして、俺は今その場を目的地にし、この地を歩いている。十数分の時が経ち、俺はある平屋の前で足を止めた。

「これが盗品蔵か、印象と少し違うな」

情報では、フェルトという名の女の子が盗品を仕入れ盗んで、それを蔵主がまとめて余所の市場でさばぐらしい。時間の問題で、今日一日で物を盗みそれを売り出すことは不可能。ので、盗まれたあの子の物は、盗品蔵の中か届いていないかのどっちかだ。

「気は一つ……か」

扉の前に立ち、とりあえず木造のそれをノックする。

「すみませんー、何方かいらっしゃいませんか?」

一応中の人呼び掛けでみるが、もし必要の場合は強行手段にする。もとい、法に反して経済活動を行つてはいるから、多少乱暴に扱つても問題ないだろう、と思つたところで気が動き出し、こちらに近づいてきた。警戒心を抱きながら、これから展開に注目したところで、

「大ネズミに」

「はい？」

先ほどの呼びかけに応じ帰ってきた返事に、俺は素つ頓狂な声を上げる羽目になつた。